

# 建築論としての都市論の課題

下川 勇 福井工業大学 建築土木工学科、FUT 福井城郭研究所

## 1. はじめに

都市という言葉の意味は辞書に記されているが、都市にかかわる諸学において、都市の捉え方は一様ではない。そもそも、都市の普遍的定義は不可能であるという了解のもとに都市の研究は出発するべきであろうし、そうである以上、都市論の定義もまた存在しえないことを了解しておくべきだろう。

しかしながら、この了解は、次のような消極的な疑問を浮かばせる。都市が定義できない以上、建築の定義にもとづいて建築を問う建築論が、どのようにして都市に向き合えるのだろうか。建築論としての都市論において、都市への向き合い方はいかなるものであろうか。ここでは、これを建築論としての都市論の課題ととらえ、諸学の都市論との関係性をふまえながら、考えてみたい。

## 2. 諸学の都市論への共感

『建築論事典』の「都市」の項目には、「建築論が、人間存在の根源を問う論である以上、そのなかで問われる都市は、人間存在の根源との関係において論ぜられなければならない」と記されている<sup>①</sup>。これは、建築論として建築を問う目的と都市を問う目的との一致を前提として、建築論が諸学にひらき、諸学が建築論にひらくように、建築論としての都市論もまた、同様の関係性が意図されている。つまり、建築論が哲学を含めた諸学とともに建築への問いに向き合うことと同様に、建築論としての都市論においても、諸学との関係において、都市への問いを深めていくことが想定されているということである。

かつて、建築論と建築史の交流が企画され、建築論者が学術誌において建築論的立場を表明したように、建築論の目的は、諸学を連携関係の構築へと誘った<sup>②</sup>。たしかに、建築論は交わりを不得手とする諸学もあると思われるが、「建築論が、人間存在の根源を問う論である以上、そのなかで問われる都市は、人間存在の根源との関係において論ぜられなければならない」とする目的においては、都市と人間関係を分析する諸学の都市論は、建築論としての都市論にさまざまな前提を示してくれるはずである。

①『建築論事典』、日本建築学会編、彰国社、2008.

②『建築論』、中村貴志、建築史学〈学界展望〉(第7号)、1986年9月；『建築論』、田路貴治、建築史学〈学界展望〉(第41号)、2003年9月.

③『マックス・ウェーバー 都市の類型学——経済と社会(第2部 第9章8節)——』、世良晃志郎訳、創文社版、1964；ジンメルの講演は『近代アーバニズム 都市社会学セレクション』(全3巻)、松本康・森岡清志・町村敬志編、日本評論社、2011に収録されている邦訳を参照した。

④都市人類学の都市論については「都市の概念——その総合的検討のために——」、中村孚美、都市研究報告46、1974を参照した。

⑤シカゴ派の都市論への理解は次を参照した。『シカゴ学派の社会学』、中野正大・宝月誠 編、世界思想社、2003。；『初期シカゴ学派の世界——思想・モノグラフ・社会的背景——』、中野正大・宝月誠 編、恒星社厚生閣、2003。；『シカゴ社会学の研究』、中野正大・宝月誠 編、恒星社厚生閣、2013。

⑥『都市空間の解剖学(新版)』、叢書・歴史を拓く『アナール』論文選4、二宮宏之・樺山紘一・福井憲彦 編、藤原書店、2011。

⑦『近代日本の軌跡 都市と民衆』、成田龍一編、吉川弘文館、1993。

19世紀以降の世界の都市化を背景とした都市の研究は、ことさら重要である。M. ウェーバーは都市が生成する構造を、社会、経済、政治・行政として類型化し、さらに自治的政治(都市ゲマインデ)の観点から、都市に内在する人間の生の営みそのものに光をあてた。G. ジンメルは「大都市と精神生活」の講演のなかで、社会的な抑圧や歴史的な束縛を受ける人間の性質に、都市に順応する普遍的個人と個人的個人の精神性を見出した<sup>③</sup>。有名な「都市革命」を提唱した考古学者 G. チャイルドの古代都市論を基調として、人類学者の多くは、発展途上国の調査・観察を通じて、都市化における人間の、社会への帰属意識(エスニシティ)、選択性の拡大からなる生活様式の変化、食糧生産や道徳秩序による行動様式の変化を見出してきた<sup>④</sup>。

都市の社会構造を社会的、文化的、地理的環境の統合としてとらえたシカゴ派の都市論も忘れてはならない。3期に区分されるシカゴ派をまとめることは難しいが、その特徴を、社会的熟度の浅いアメリカならではの、社会秩序が高度化していく過程をとらえた都市論であると見なしてもいいだろう。特に、「自然地域」の理論によって人間の諸様態を分類学的、生態学的に整理している R. パークの都市論、人間の行為や価値観、そして社会的規範に着目した H. ブルーマーや E. ヒューズの都市論、「社会的世界」の構造を理論化した A. ストラウスの都市論は、都市という社会に生きる人間の性質を知るうえで、有効である<sup>⑤</sup>。

これらの、いわゆる都市社会学と都市人類学の古典は、それが諸学の都市論の基底を成すように、建築論としての都市論においても現実の都市に照射する手立てとなり、なにより都市への問いの源となることだろう。

アナール派の歴史学的、社会学的、人類学的都市史研究を紹介する『都市空間の解剖』の邦訳版刊行にあたって、日本の読者にあてたル＝ロワ＝ラデュリのメッセージ「人間の歴史の普遍的な特質の解明を目指しているのである」との言明は、諸学の都市論が都市を通じて人間存在の解明に対峙していることを教えてくれる<sup>⑥</sup>。かつて、都市の多様性を機能面からとらえ、近代建築国際会議(CIAM)やアテネ憲章が標榜した機能的都市の理念を実現するべく、都市を機能分類によって規定しようとした時代には、人間存在は軽視された。しかし、戦中戦後の厳しい時代の経験から発せられた、人間にとっての都市の在り方という問題は、諸学において方法論は異なろうとも、中心的な議題になっていった。近代日本の、都市の空間構造の変遷を類型的に把握しようと努めた『都市と民衆』では、「生きられた空間」の観点において民衆の働きに着目した。ここには、外的要因に翻弄される民衆や、積極的に都市を変えようとする民衆があり、都市と人間の相互干渉の生き生きとした様子が示されている<sup>⑦</sup>。現代都市への批判的観点を求めるべく、都市の個性が顕在化していた時代の都市(伝統的都市)について、その諸相を探究する『伝統都市アイデア』には、都市の生成を図っ

⑧『伝統都市1アイデア』、吉田伸之・伊藤毅編、東京大学出版会、2010。

⑨前掲書所収の「移行期の都市アイデア」、伊藤毅、pp.3-38。

⑩この「経験的に」とは、私が数年来かかわる永平寺門前町のまちづくりを通じて得た経験である。永平寺境内に閉じた一円性は、門前町の生活文化や商いの方向性にも及んでいる。一方の門前町の開かれた「境界性」は、道路の沿線に延びていき、どこまでが門前町なのか領域を曖昧にしている。この総じて領域性については、永平寺の空間形成を扱った次の拙稿も参照されたい。「大本山永平寺と白太山天童寺の山門空間構成の比較」、日本建築学会北陸支部研究報告集、第57号、pp.621-622、2014；「大本山永平寺との関係性から見る永平寺門前町のまちづくりへの一考察」、日本建築学会北陸支部研究報告集、第57号、pp.623-625、2014；「空間の領域性から思索する永平寺門前町のまちづくり——高野山門前と伊勢神宮門前を参考にして——」、日本建築学会北陸支部論文報告集、第58号、pp.427-429、2015。

⑪『永平寺史』上巻、永平寺史編纂委員会、P.79、昭和57年。これはウィトルウィウスの「都市の建設に当たって健康性が求められる場合、最も適度に調和されている天空の方角を選ぶよういっそう注意深く探究する」との見識と同様、場所選定の意図が依拠する道理（道元は宗教の教理、ウィトルウィウスは自然の摂理）によって定められていたことをあらわしている。『ウィトルウィウス 建築書』、森田慶一訳注、東海大学出版会、p.18 (1-4-8)、1979年。

⑫『芭蕉文集 去来抄』、井本農一他校注・訳、小学館、P.84、1985年。

⑬『街道をゆく18——越前の諸道』、司馬遼太郎、朝日新聞出版、p.159、2008年。

た歴史的人物や都市計画家の活動、民衆の経済活動や宗教活動による集団の働きなど、さまざまな観点において、人間と都市の関係が問われている<sup>⑧</sup>。

歴史的な諸学の都市論を一意的に扱ったことは、浅学ゆえとお赦し願いたい。しかしながら、諸学の都市論を一意として見つめたとき、そこに、人間を介しての都市、都市を介しての人間という、人間を中心とする都市論としての合意があることに気づくことができるのである。

### 3. 諸学の都市論からの発起——永平寺の環境形成について

興味深い分析として、『伝統都市アイデア』所収の都市類型がある。ここには、「建築論が、人間存在の根源を問う論である以上、そのなかで問われる都市は、人間存在の根源との関係において論ぜられなければならない」とする建築論としての都市論が、その目的において都市を考究する手がかりがある。

この都市類型の特徴は、古代の都城と城下町が主軸であれば、宗教都市と交易都市が副軸になるとの考えを前提としながら、都市の発展過程をとらえることにある<sup>⑨</sup>。私の関心にもとづき副軸に注目すると、宗教都市と交易都市の違いに領域性の相違が見出されている。経験的にじっくりとくるのは、境内の「一円性」にたいする町の「境界性と両義性」についての解釈である。中心核をもつ境内という領域的一円性からすると町は従属にあたるが、一方の町からすると独自の境界性を持っているため、町は境内に対して両義的であるという捉え方である<sup>⑩</sup>。

この領域性を可能にしているものは何なのだろうか。この建築論的関心にしたがって、私がしばらくまちづくりに参加している永平寺の環境形成の変遷（明治期、昭和期、平成期）を辿ってみる。

永平寺は開祖道元の理念に基づく禅の修行道場として、道元が中国白太山天童寺での修行時代に師事を得た如浄の教え「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」（意訳：自然に囲まれた場所で静かに禅の修行を行うこと）に依拠して開山したとされている<sup>⑪</sup>。道元の配慮は時代をくだり、松尾芭蕉や司馬遼太郎という訪問者に享受され、次のような感想を抱かせた。

#### 松尾芭蕉

「五十丁山に入て、永平寺を礼す。道元禅師の御寺也。邦幾千里を避て、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆゑ有とかや」（元禄2年 1689年）<sup>⑫</sup>

#### 司馬遼太郎

「外界からの訪客はなく、まことに雲水の道場としてよく清規がまもられている感じで、山も谷も人も清澄であるような印象であった」（昭和24年 1949年）<sup>⑬</sup>

永平寺の環境形成は如浄の教えである修行環境の確立を目指すことを始まりとして、それを具象化する環境形成として、人を遠ざける自然の厳しさが必要であった。芭蕉と司馬の感想は、継承されつづける道元の意図への共感であったといえるだろう。永平寺とは、宗教教理と自然環境とが道元という生成者を介して統合した、まさしく禅の地であると理解することができる。

## (1) 明治期の環境形成

司馬の時代よりもまえ、明治期の参道整備の大事業をとりしきった六三世が、「加焉凡了三里の道路は狭隘屈曲礫石突兀として末派の僧侶祖廟を礼し掃塔せんと欲するもの及び全国信徒の参詣を冀望するもの等道路の悪しきに恐怖して逡巡躊躇終に拝登せざる者多し。(中略)吾等佛祖の児孫たるもの吾が祖廟に詣する道路険阻にして人の往来に苦しむを傍観しこれを改修せずして可ならんや」<sup>14</sup>との思いのもとに、末派へ改修費の寄付をうながす告諭を発した。告諭から2年後に完成をみることになったこの事業は、末派の僧侶や全国の信徒の、拝登の困難という状況に端を発した事業であった。

<sup>14</sup>『永平寺史』下巻、永平寺史編集委員会、p.1359、昭和57年。なお原文の旧字体を新字体に変換して記している。

しかし、六三世の意図するところは、永平寺の護持継承にあった。告諭の筆頭に「吾が越本山は深山幽谷に卓立して昔高祖大師在世の日一箇半箇を接待し玉へる勝躅を憶念する時は児孫をして欣慕に堪へざらしむ」<sup>15</sup>と記し、永平寺において道元の教えが継承され続けることへの意義を強調した。道元の教理、深山幽谷の自然、永平寺が一つとして六三世に統合された。

<sup>15</sup>前掲書、p.1358、新字体に変換して記載。

また、告諭が示すとおり、経済は支配的であった。当時の永平寺は財政難で、工費を捻出するためには末派1万3千の寺院に頼らざるを得なかった。この事業は、いわば末派が支えた事業であり、六三世の統合的配慮に末派が加わることにより成就された。

## (2) 昭和期の環境形成

昭和期の観光ブームは地方の中山間にまで及んだが、永平寺でも観光を中心とした開発が進み、後年に再訪した司馬に「客を吐きだしたバスが多くうずくまっていて、さらにゆくと、団体客で路上も林間も鳴るようであり、おそれをなして門前から退却してしまった」(昭和55年 1980年)<sup>16</sup>と言わしめた。これはすなわち、過去の「山も谷も人も清澄であるような印象」が失われた環境に、永平寺が変化したことを意味している。この変化は、訪客の存在に起因することを司馬の前後の感慨から伺うことができ、さらに司馬の言を頼りにすると、昭和25年から昭和55年の間に迎えたものと推測できる。

<sup>16</sup>前掲「街道をゆく18——越前の諸道」、p.159。

契機となったのは、おそらく、道元700回大遠忌に向けた昭和25年の観光道路整備事業であろう。これは大正14年に開業した駅舎の活用を前提としながら、大型バスの乗り入れをも想定した計画であった。工費は末派の寄付と国庫

補助により補填した事業であった。この事業を境として門前町は、観光客に対応するべく各世帯が土産店を開業していった。

ここには、前時代からの転換という大きな決断が見られる。すなわち、永平寺の環境形成の目的であった「安閑無事」からの決別である。あらゆる都市開発が現状の克服を目指して行われていることを踏まえると、おそらくは、「安閑無事」という環境との関係性に問題が生じたのであろう。結果、永平寺は、明治期の参道整備のときとは異なる人々を時代の要請に応じて招き入れた。観光客という新たな主体が永平寺の環境形成に加わり、門前町も観光客をもてなすための主体に成り変わった。「安閑無事」に対する永平寺、観光地に評価を



写真1 昭和期の道路整備前の旧参道（昭和初期）

出典：『写真アルバム 坂井・あわら・奥越の昭和』、奥山秀範 監修・執筆、いき出版、2017

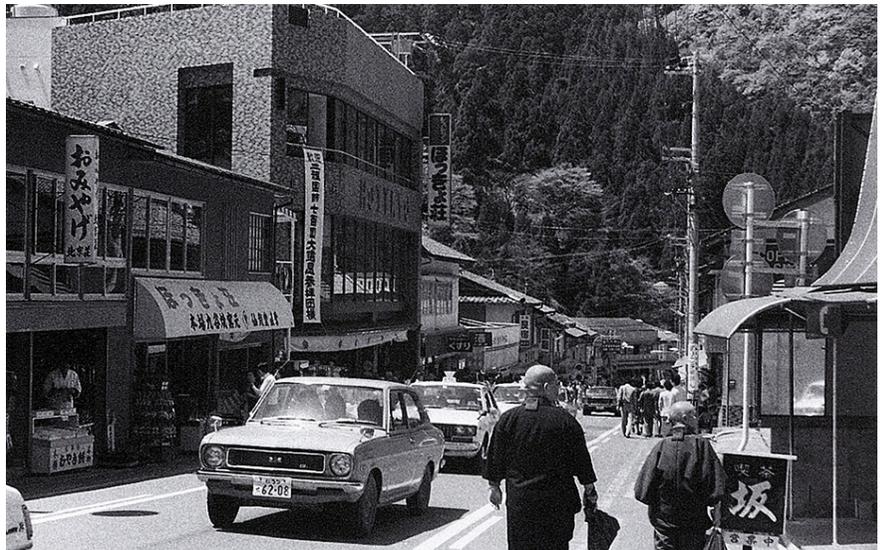


写真2 司馬が再訪した当時の表参道（昭和55年）出典：奥山前掲



写真3 平成期の整備後の旧参道（写真1と同じ通り）筆者撮影

あたえる観光客、その観光客をもてなす門前町、そして経済を支えた末派の寺院と国、これらの統合により、永平寺は新たな環境形成の方向性を見出した。

### (3) 平成期の環境形成

観光客が半減した平成20年代に、集客の向上を目指して歴史の再生が企画され、道元の時代の参道とされる道路整備がおこなわれた。歴史の再生が求められるその意図は、昭和期の事業を始まりとして消失した歴史を取り戻すことであった。永平寺の環境に観光客を招き入れることで失った「安閑無事」の再生、その目的が集客の向上であることには大いなる矛盾があった。この矛盾は、歴史を取るのか経済を取るのかの議論を生じさせ、永平寺は歴史、門前町は経済という関係性に発展した。昭和期に成された環境形成は、古くから調和していた永平寺と門前町の共存関係に変化を生じさせた。これは、昭和期の転換から70年の歴史を積み重ねてきた、門前町的生活様式の定着を意味している。

永平寺、門前、国、地方自治体、開発コンサル、施工会社、そして僭越ながら私が直接的な環境形成の主体となった。そしてこれに末派の僧侶、全国の信徒、世界の観光客も示唆的な主体として加わった。永平寺は「安閑無事」を、門前町は生活を、国と地方自治体は制度を、開発コンサルと施工会社は技術を、私は判断を、末派の僧侶や全国の信徒は責務を、世界の観光客は評価を、それぞれの価値の統合が図られた。結果は現在の新参道が示すとおりであるが、このまちづくりは現在もなお進行中である<sup>17)</sup>。

<sup>17)</sup> ここで、本論とは直接に繋がらないが、永平寺の環境形成に向き合った私の状況について記しておく。ここには、問題をかかえる現実の都市を理解しようとする私の「解釈」という行為がある。この解釈の過程に、諸学の都市論とのつながりを意識するようになった動機がある。[私は建築論をまなぶ者として、建築論的立場（私にとってそれは、外的諸要因をとおして理解する試み）から、永平寺と門前のあり方を検討した。多くの示唆を自然と歴史から享受して判断している。永平寺建立の起源とされる道元が修行した天童寺を視察して、永平寺と自然のあるべき関係に解釈を加えた。また、伊勢神宮内宮と商店街の視察、高野山奥の院と商店街の視察から、永平寺と門前のあるべき関係にも解釈を加えた。これらの解釈が統合され、判断の基準となり、永平寺の環境形成に向けた私の意図となった。]

## 4. 諸学の都市論への返還

宗教都市と交易都市における領域性の観点から着想をえて、永平寺と門前町における領域性の生成と変化について概観した。永平寺の一円性は、道元の教えを核とした修行環境の護持によるが、門前町はそれに従いながらも、観光客を受け入れることで生活様式を変化させ、独自の環境形成の保全を目的化することによって、その両義性を表出した。この領域性に伺えることは、宗教都市として抗いようのない矛盾である。つまり、道元の配慮による一円性(安閑無事の環境)は、昭和期を境として永平寺の環境から消失したが、これは、修行環境を護持する永平寺の命題と、仏法を広げる仏教の命題という、二つの世界観が共存した宗教都市ならではの環境形成なのである。

この宗教都市と交易都市にかかわる領域性の問題は、それぞれがどのような適所をえているのか、そして、それぞれがどのように住まう場所を構築しているのか、このような建築論としての問いを想起させる。

しかしながら、この問いには、都市という社会的集合体としての難しさが潜んでいる。つまり、「適所性」と「住まうこと」の問題は、門前町が建物・住民・商いの集合体であることへの理解、そして、それらが統合され維持される仕組みへの理解、さらには、この仕組みが歴史的・社会的・経済的であることへの理解を前提とする。建築論は個別の事象を扱わないとされ、ときとして形而上学的に現実から離れていくが、この「適所性」と「住まうこと」への問いを現実にとどめるならば、現実を根を下ろす諸学の都市論との連携が求められるべきであろう。このとき、諸学の都市論から示唆をえた建築論としての都市論の問いは、諸学の都市論に返還されることになる。

この、建築論としての都市論と諸学の都市論との合意が、一方的であることは承知している。まずは、かつて建築論と建築史のあいだで行われた交流のように、それぞれの立場を主張しながらも、合意形成が図られるような機会が訪れることを期待してやまない。

## 謝 辞

執筆にあたり、永平寺より頂戴した貴重な諸資料に基づきました。また、門前町の「ほっきょ荘」の奥村様、「山口みやげ店」の山口様、「團助」の山本様、「雲粋」の山口様より多大なるお力添えを頂きました。本紙を借りて、皆様に謝意を表します。